



3.11から1年半が経過した これからの福島県の移住交流施策

NOV. 2012

「ふくしまふるさと暮らし情報センター」 窓口 星 久美子



3.11から1年半が経過した福島県内の相談の傾向

2011年の傾向

- ・若い人の移住相談は少ない。かつ、若い人の場合は地域が決め打ち(Uターン、縁、ボランティア)
- 団塊世代 : いわき、県南・県中
- ボランティア : 沿岸部、県北
- 会津地域 : 相談者激減

2012年の傾向

- ・相談者が緩やかに回復傾向
- ・ファミリー層: 夫婦のいずれかが福島県出身。
- ・ボランティアの定住化が進み始めている。ネックは住宅。
- ・農業も、地域をあげて取り組んでいる地域には新規就農者も入り、定住化しつつある。

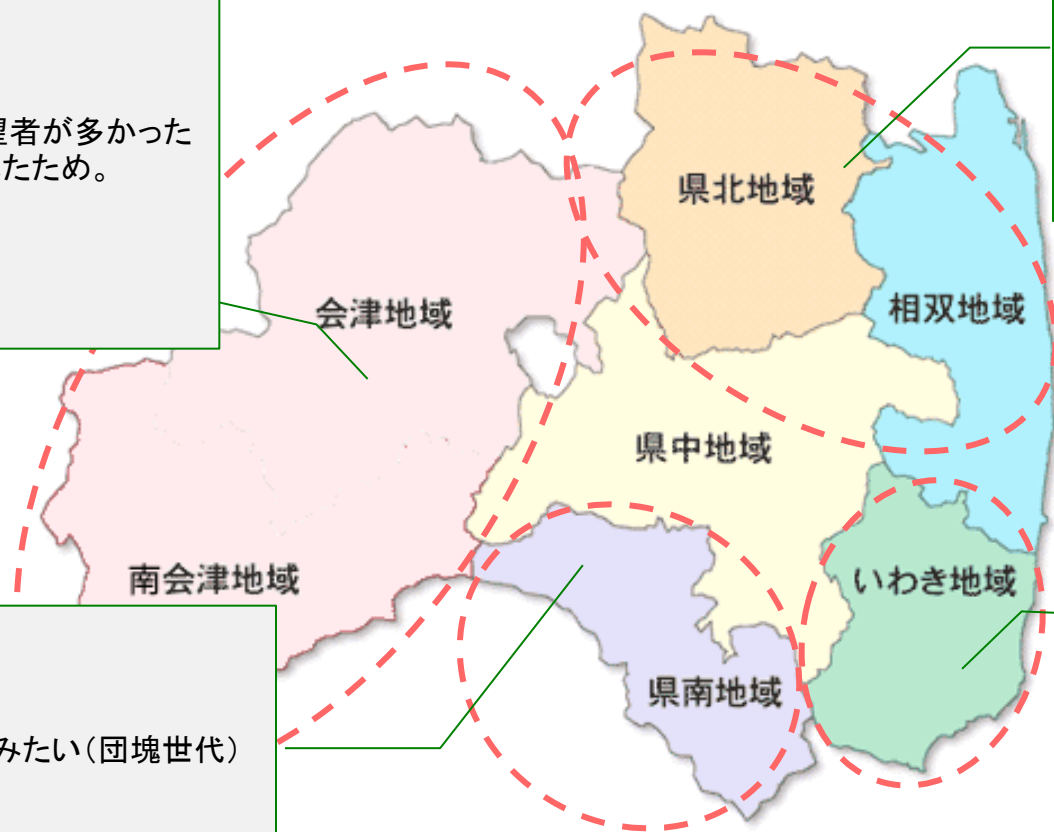
【相談の傾向】

2011年)
相談者激減。
※若者・新規就農希望者が多かった
ので、その層が激減したため。

2012年)
・就農希望者
・ファミリー層

【主な移住相談】

2011～2012年)
・Uターン希望
・復興に携わりたい
(若者、団塊世代、ボランティア)



【主な移住相談】

2011年)
・Uターン希望
・セカンドライフを楽しみたい(団塊世代)
2012年)
・就農希望者
・ファミリー層

【主な移住相談】

2011～2012年)
・Uターン希望
・復興に携わりたい
(若者、団塊世代、ボランティア)

・セカンドライフを楽しみたい
(団塊世代)



◆二本松市東和町

移住者がほとんど離れなかった

<地域の特徴>

- ・NPO法人ゆうきの里ふるさとづくり協議会の新規就農支援を通じて、地域にUターンされる方が多かった。震災後、地域の農業について連日話し合い、地域の未来について話し合う。
- ・有機農業等に取り組む若者たちも地域から離れることなく、震災後も新たな移住者が誕生している。



◆南相馬市

ボランティアが定住化
少なくとも10人以上定住

<地域の特徴>

- ・東電福島第一原発事故の影響により、県内外に避難を余儀なくされている人も多い。
- ・南相馬の人の温かさに触れ、定住される人も増えつつある。
- ・ネックは、住まいと雇用
- ・南相馬市ふくしまふるさと暮らし情報センターが、移住相談、震災前に移住していた人のフォローアップに努めた。



◆昭和村 2011年の移住者:6組

<地域の特徴>

- ・積雪量が多くて冬に農業ができなくても暮らしていける農業としてのカスミノウ栽培による新規就農
- ・NPO法人芋麻倶楽部による、国際ワークキャンプ(ボランティア)の受け入れ等の交流
- ・「からむし織の伝承」を目的とした織姫制度など、昔ながらの知恵・手業を伝承



◆石川町

東京で一人生きるより、助け合える地域で生きていきたい

<エピソード>

震災後に、単身東京から移住したAさんは、震災後東京から物がなくなった話をニュースで聞いた石川町の、交流をしていた地域の方が自分を気に掛けて何かを送ろうとしてくれた。大した移住支援策がある訳ではない。しかし、人の温かさ、コミュニティがしっかりしている話を聞いて、この地域で、この皆さんと生きていこうと思った。



手厚い移住支援がある訳でもない
空き家バンクなどの体制もあまり整っていない
雇用の場も少ない

ならば、何故……

地域の皆さんが、「地域住民が自ら」

- ・自分たちの地域は「どんな地域なのか（特色、問題等）」
- ・自分たちの地域は「どんな未来・カタチ」を望むのか
- ・自分たちの地域に「どんな人が必要」か
受け入れを行っている。

を共有して、
を話し合っ
て決めて

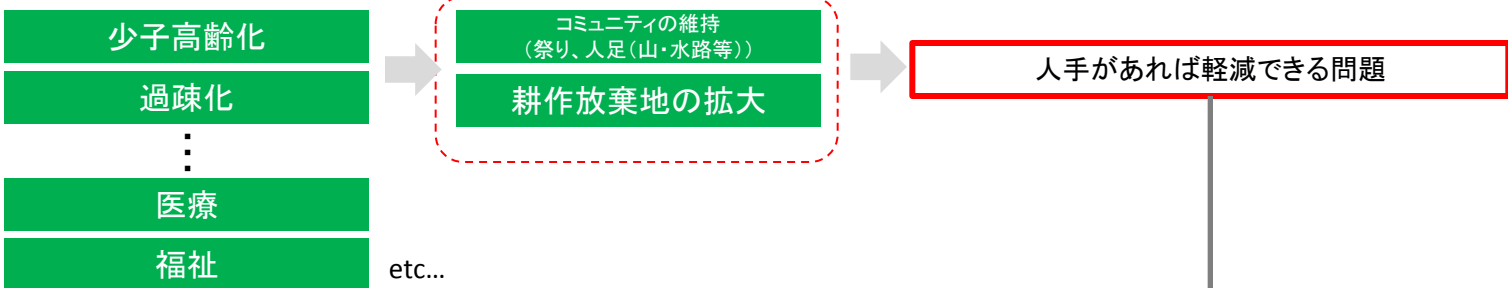
外部から人を受け入れることも重要だが、以下の2点がまず重要。

- ・**どんな地域の未来をつくっていきたいかを話し合っ**
- ・**来てもらう人に何をしてもらえばいいのか**

地域内で、地域の皆さんが話し合っ、「**地域の在り方**」を考えてください。

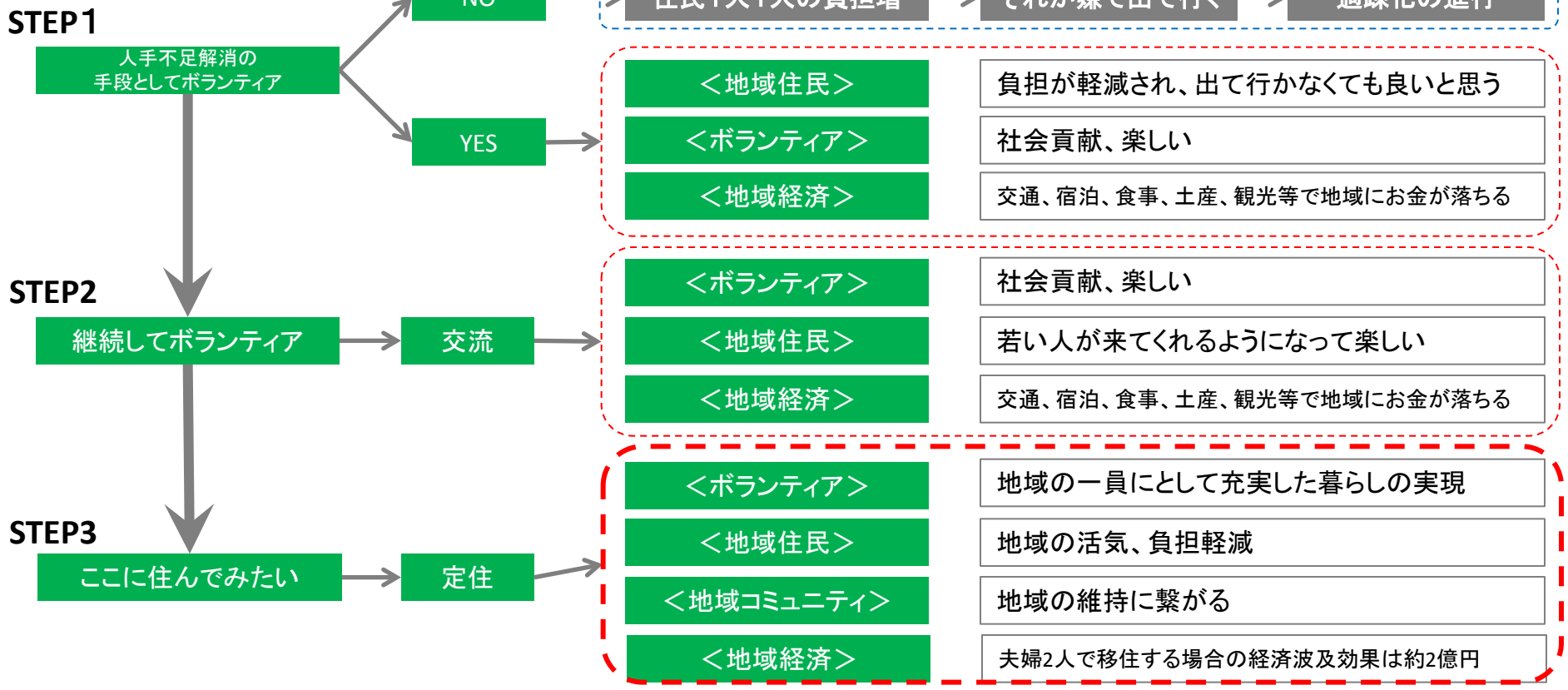


今後の福島の移住交流の流れ (CASE 過疎地域)



悪循環

<ボランティア等を活用した場合>





福島県の若年層の人口流出

ターゲット

福島県のために
何かしたい若者

福島に住み続け
たい/続ける若者

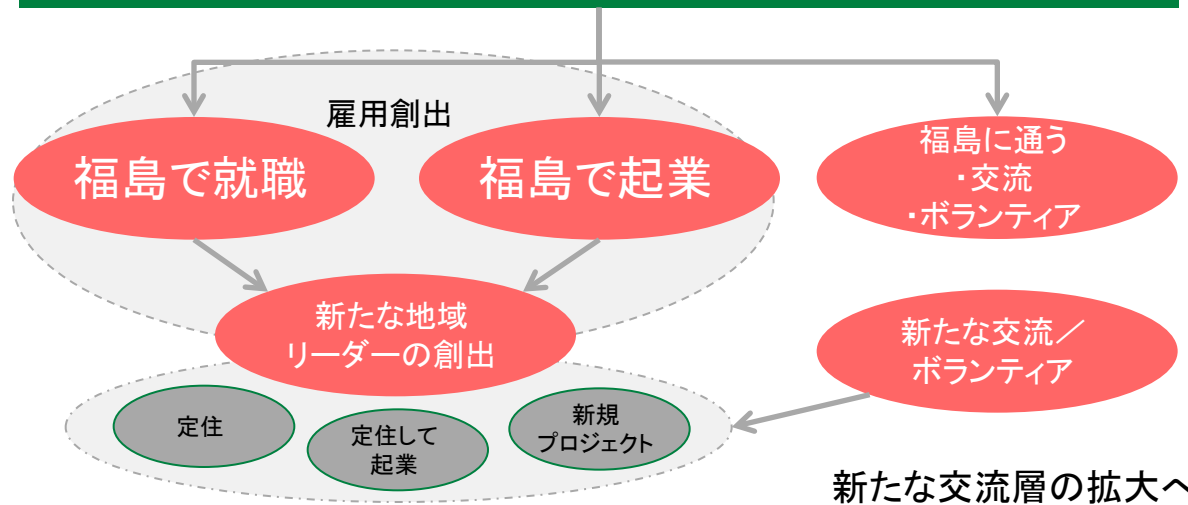
居住していないが
何かしたい若者

インターンシップ・ボランティア・スタディツアー等

STEP1 現状・課題発掘

STEP2 現状・課題解決の手法を学ぶ

中長期的復興・地域活性のビジョンを描ける人材の育成



新たな交流層の拡大へ



事例紹介：【福井県】ふるさとワークステイ



認定NPO法人
ふるさと回帰支援センター

ふるさとワークステイとは

福井県のふるさとワークステイは、福井県の農山漁村に滞在し、地域住民と交流しながら、農作業や地域作り、環境保全活動等のボランティアをするもの。お客様としての体験ではなく、地域でお手伝いが必要な作業がある時に随時受け入れる。そして、ボランティアの代わりに、原則として、地域の農家民宿へ無料で宿泊ができる。

【効果】

体験住宅も、実際にそこで暮らすイメージができるが、地域との交流がなければあまり意味がない。特に、田舎を知らない方にとっては、農家民宿に宿泊すれば、地域の方から地域の魅力や環境、風土などを知ることができ、かつ地域とのつながりができるのでおすすめである。このプログラムがきっかけで、若い層を中心に移住される方も少なくないとのこと。

【ポイント】

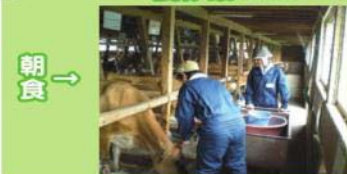
定住希望者には農家民宿をどう活用すれば移住に繋がっていくのか農家民宿を活用して移住した先輩がいれば、ぜひインタビュー等をお願いするなどして、農家民宿を有効に活用することがポイント。

ふるさとワークステイ 日程例【2泊3日】

1日目 PM現地着 → 農作業 → 地元住民との交流会・民泊



2日目 農作業(午前) → 朝食 → 農作業(午後) → 昼食 → 夕食



3日目 朝食 → 解散 → 終了後(観光・体験・買い物等) → 帰宅



事例紹介：新潟県：山の暮らし再生機構

2004年に起こった新潟県中越地震は、中越地域が以前から抱えていた諸問題を顕在化させる結果となった。その中でも最たる問題が、中山間地域における集落の過疎高齢化である。

新潟県中越大震災復興基金では、その諸問題に対応する財政支援策とともに、人的支援策として「地域復興支援員設置支援」メニューを創設した。そのメニューを活用し、現在では中越の6市町で地域復興支援員が活動を行っている。

実際に、支援員として入った若者が、地域に定住した事例もある。

